山の師匠

馬場岩ひろし

名前も、どこのどういう人かも知らないが、私が心の中で山の師匠と呼んでいる人物がいる。私が二十代の頃に奈良の大峰山で出会った一人の登山者。角張った輪郭に細い目、頭にはバンダナ。汗を拭きながら、その男は一人で歩いていた。特に対面して特別な時間を持った訳ではない。そのとき歩いていた登山コースがたまたま同じだっただけである。

男の使い込まれた背中のザックには小さな鐘がぶら下がっていた。男が歩を踏むたびに、鐘はカラカラ、カラカラと硬質で甲高い音をたてた。鐘などつけて耳障りなことだ——私はその音を不快に感じていた。

男より私のほうがずっと歩くのは速かった。しかし私が休んでいるといつの間にか男は近づいていて追い越していく。休憩を終えて歩き出すとすぐに男を捉え、追い越し、引き離す。そんなことが繰り返された。

その日歩いた大峰山のルートは一般的なメインコースで、これといった難所はない。ただ行程は長かった。自分の体力を過信していた私には思いがけず苦しい登山となった。

稲村ヶ岳のテント場から弥山まで、計画を欲張って長くしすぎていた。テントや食料で荷は重く、また連日の残業で疲労もたまっていた。そのうえコース途中の水場で水筒に水を補給しなかった。水場には人が多く、混んでいて面倒だったのだ。水は水筒にまだ少し残っていて、補給すると重くなるという理由もあった。しかしこれがいけなかった。暑さと長時間に渡る歩行でバテが来だした。のどが渇くが水は残り少ない。通常四十分歩いて十分休むのが自分のペースなのに、それが維持できなくなってくる。二十分歩いては二十分休む。ペースはどんどん落ちていく。次第に夕方に近づくが目的地の弥山キャンプ場まではまだ距離がある。そのうえ最後は大きな上り坂を詰めねばならない。疲れが極まるが、何とかして辿り着くよりほかに選択肢はない。歩き続けるしかない。

疲労困憊しながらも最後の上りの基部に到達した。この坂を上りきればキャンプ場だ。俯きながら重い足を前へ出し続ける。このまま上へ。気持ちが途切れたらおしまいだ。上へ、ゴールへ。

と、一瞬道を見失った。立ち止まって辺りを見回す。正しい道はどこだ……。次の瞬間、私は気を失ったように眠りに落ちた。意識なくその場に、荷を背負ったまま沈み込んでいた。体はもう限界だった。

どのくらい眠っていたのだろう。遠くから音が聞こえる。カラカラ、カラカラ、カラカラ……。私は目を覚まし、起き上がった。男の鐘の音だった。あれほど不快だった音が、私を、あったかもしれない疲労凍死から救った。男は傍らを歩き過ぎながら、「ゆっくり行ったほうがいいですよ」と私に言った。細い目が笑いかけているように見えた。

最後の力を振り絞って坂道を上りきり、キャンプ場に着いた。もう日が暮れかかっていた。満員のテント場のわずかな空きスペースにテントを張ったあとは、もう食事を作る力も残っていなかった。寝袋の準備もそこそこに、私は朝まで眠り続けた。

あれ以来男に会うことはもうなかった。だが折に触れ、私は男の言葉と鐘の音を思い出す。

ゆっくり行ったほうがいいですよ……。

カラカラ、カラカラ、カラカラ……。